王のための物語 ―太宰治「走れメロス」試考―

A story for the King : a study of Osamu Dazai's "Hashire-Merosu"

福島工業高等専門学校　一般教科　高橋宏宣

Hironobu Takahashi
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（平成20年9月25日受理）

This article treats the subject of "Hashire-Merosu"written by Osamu Dazai.It has been said that this text includes subjects of justice,honesty and friendship.But this article refers to another one by carefully examing the king who cannot believe the words uttered by the people and Merosu,who restores peace to the community through his words and actions.

Key words: Osamu Dazai, Hashire-Merosu, the king

1

太宰治の「走れメロス」は、「正義」「信実」「友情」の尊さを称揚した物語として、人口に膾炙した小説である。この小説がドイツの詩人シラーの詩「人質」を典拠とした翻案であることも広く知られているが、シラーの原作と太宰の創作を比較してみると、太宰が原作にない三つの要素を付加していることがわかる。それは、①メロスの性格、②王デイオニスが暴君に変貌した経緯、③群衆がメロスを「英雄」として受け入れて王の万歳を叫んだ結末、である。特に③の改変は、太宰の「走れメロス」が、シラクスの市の秩序回復に力点をおくという主題の変更に関するものであり、とりわけ重要であると思われる。

本稿は、これらの太宰の付加箇所の考察を通し、「正義」「信実」「友情」とは別の、作品に伏流する主題を考察しようとするものである。

2

テクスト冒頭には、メロスの性格と身上が簡潔ながらも具体的に記されている。

> メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮して来た。けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であつた。けふ未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里はなれた此のシラクスの市にやつて来た。メロスには父も、母も無い。女房も無い。十六の、内気な妹と二人暮しだ。

メロスは「邪悪に対しては、人一倍に敏感」であったがゆえに王デイオニスの「邪知」と「暴虐」に「激怒」し、「政治がわからぬ」にもかかわらず、王の排除を「決意」する。すなわち、メロスという男は、知性に基づいて状況を分析し、出来事の結末まで見通してから判断を下すような、思弁的人間

ではない。メロスは無知で短気で、感情的に行動を決定してしまう人物である。

メロスはシラクスから「十里はなれた」「村の牧人」で、結婚を控えた一人の妹以外に係累がない。つまり、シラクスの市民にとって、メロスはその人となりを知る手がかりがない。メロスはやがて救うことになるシラクスの市の外部からやってきた無名の人物として登場する。

二年ぶりにシラクスを訪れたメロスは、賑やかな歌声を失った街の黄昏に不審の念を抱き、老爺をつかまえて強引に変化の理由を尋ねる。その結果わかったのは、王デイオニスの残虐な行いであった。老爺によれば、デイオニスは「乱心」したのではなく、人々が「悪心」を持っていると信じ込み、人を殺すのだという。それを聞いてメロスは激怒し、王の排除を決意して単身王城に乗り込んでいく。

メロスは「単純な男」とされているが、残忍で恐れられている王の居城へ懐中に短剣を忍ばせたまま入っていくような無防備な男でもある。メロスは考える前に行動し、その行動も状況に応じて最善の策を講じるといった臨機応変さを欠いている。その結果、メロスは目の前の出来事に感情的に反応することを繰り返し、騒ぎを大きくしてしまう。メロスの「単純」さとは先の見通しを常に欠いていることと同義であり、このことは、メロスが損得勘定のできない男であることを物語っている。

警吏に捕縛されてデイオニスの前に引き出されたメロスは、「市を暴君の手から救う」という自らの使命を述べ立てる。メロスは、王が「人の心を疑ふ」という「最も恥づべき悪徳」を犯し、「罪のない人」を殺して「自分の地位を守る」ことを「平和」と詐称していると告発する。

それに対するデイオニスの返答では、平和を望みつつそれが実現できない何らかの理由が存在するということが仄めかされているのだが、メロスは自身の主張の正しさを一点も疑わない。その後メロスは妹の結婚式のことを言い出し、処刑まで三日間の猶予を与えてほしいとデイオニスに懇願し、身代わりとして「無二の親友」であるセリヌンテイウスを差し出すことを申し出る。メロスの申し出が極めて身勝手で、他人の都合など考慮しない自己中心的な言表であることは言うまでもない。

デイオニスとメロスの応答からは、常に相手の真意に猜疑に満ちたまなざしを差し向けずにはいられない者と、思うが儘を後先考えず真率に口に出す者の違いが浮かび上がってくる。デイオニスは次のように言っている。

「口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまへだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

デイオニスは人の口にする「清らかな事」の向こう側にある「腹綿の奥底」が見えると言っている。それは、人間の心に〝本心〟とでも言うべきものを納める一角（内面）が存在するという信憑である。デイオニスは、口に出る「清らかな事」と不可視の「腹綿の奥底」とのずれが気になって仕方がないのである。それに対して、メロスは次のように答える。

「ああ、王は悧巧だ。自惚れてゐるがよい。私は、ちやんと死ぬる覚悟で居るのに、命乞ひなど決してしない。ただ、―」

メロスは王の言葉を「自惚れ」だと言って斥ける。メロスはデイオニスの言う「腹綿の奥底」なるものが、王の頭の中で拵えあげた虚構にすぎないと指摘しているのだ。メロスが口にした「死ぬる覚悟」には、「命乞ひ」を密かに謀る「腹綿の奥底」など、どこにも存在しない。メロスにしてみれば、デイオニスの方こそ、ありもしないものを頭の中で想像的に作り上げて人にあらぬ罪を着せているのである。

メロスは人間の内面というものに重きを置かない。後に再説するが、メロスは内面への囚われが迷妄の元凶であることを本能的に見抜いている。メロスが感情的で思慮を欠いた思いつきのようにしかみえない言動を取るように描かれるのも、内面への拘泥からほど遠い人物であることを示すためなのである。

メロスは「市を暴君の手から救う」ために勇んで王城に乗り込んだのであったが、それによってメロスにもたらされる果実は何もない。誰から頼まれたわけでもないのに、自らの命を賭け、友の命まで危険に曝して、居住地でもないシラクスの市に平和を取り戻そうとするメロスは、それによってもたらされるものからの分け前を何も目論んでいない。つまり、メロスは、この上なく無欲な男なのである。こうしてこの物語は、外部から来た無名で無欲な

男が、共同体の秩序をどのようにして回復していくのかということをめぐって展開することになる。

3

メロスによって「邪智暴虐の王」とされたデイオニスは、元来嗜虐的性向を備えていたのであろうか。

デイオニスは命令を拒む者を容赦なく殺す残虐な暴君である。しかし、それが本来の性質に由来するものでないらしいことは、二年の間のシラクスの街の変化から推察される。

二年前のシラクスは「夜でも皆が歌をうたつて」いる「賑やか」な街であった。そこからは、当時のデイオニスが市民に対して寛大で、市民もまた王に対して友好的であったことが窺える。

しかし、メロスが街を訪ねた今は、人々は無言で、見知らぬ者に対しては警戒の念を抱いていた。この原因は、ひとえにデイオニスの個人的事情に由来し、突き詰めれば、人を信ずることができなくなったデイオニスの心の中の問題に帰着する。

メロスが話を聞いた老爺によれば、王は、妹婿→自身の世継ぎ→妹→妹の子→皇后→賢臣アレキスの順に殺害したという。この順番に明らかなように、デイオニスが人を殺し始めたのは身内からであり、しかも王位継承権のあるものを次々と殺している。つまり、デイオニスは自ら王権の血筋を絶やそうとしているのである。これが老爺の言うとおり「乱心」でないとすれば、デイオニスの心は凄まじい苦痛で引き裂かれていることになる。

その身辺に陰謀めいた事件があったのかどうかを含め、デイオニスが人を殺し始めたきっかけが何であったか、テクストでは一切明かされていない。明かされないことによって、デイオニスの心的苦痛を癒す道を過去に遡って求めることはできなくなっている。だから、デイオニスが心的苦痛から解放され、以前のようにシラクスを平和に統治していた状態に戻ることを欲するとすれば、その糸口は、身内を虐殺した因果とは別の水準になければならない。

メロスは全く与しなかったが、王が「おまへには、わしの孤独がわからぬ」・「わしだつて、平和を望んでゐる」と言ったのは本心からであったと思われる。元々王はシラクスの市民との間に信頼関係を築いて「平和」を維持していたのであるし、市民もそれを享受し、王との間に友好的な関係を結び得ていた。ところが、デイオニスは何らかの出来事をきっかけに、人は「私慾のかたまり」で「悪心」を抱いていると思い込み、人を信ずる事が出来なくなってしまった。デイオニスは、限定された関係内で起こった出来事から導き出した結論を人間すべてに該当する普遍的真理であると拡大解釈してしまったのである。

「だまれ、下賤の者。」王は、さつと顔を挙げて報いた。「口では、どんな清らかな事でも言へる。わしには、人の腹綿の奥底が見え透いてならぬ。おまえだつて、いまに、磔になつてから、泣いて詫びたつて聞かぬぞ。」

このように言うデイオニスは不信の病に陥っている。人は往々にして言葉と本心が食い違うものであり、そのこと自体は日常の些事にすぎない。しかし、デイオニスはこの程度の些事に猜疑の念を抱かずにはいられないほど神経過敏になっており、「清らかな事」を言う人の「腹綿の奥底」を常に見透かし、そこに「私慾のかたまり」を見てしまう。これは、不信を抱く必要のない対象にまで不信を見出さずにはおられない反復強迫である。

そのようなデイオニスの不信は、メロスに言わせれば、ありもしないものを見透かしてしまう「悧巧」な者の「自惚れ」にすぎない。第三者の目から見れば、デイオニスは自分で「腹綿の奥底」なる虚構を作り出してそれに苦しんでいるようにしか見えないのである。

市民は王のそうした思考形式を察知し、無言を貫いている。言葉と「腹綿の奥底」が食い違っていると王が思い込んでいる以上、どんな言葉を口に出しても王はそれを必ず誤読するからである。だからといって、無言を貫けば安全というわけでもない。王はそれを面従腹背と解釈し、無言を貫く市民の「腹綿の奥底」に、服従とは相容れない心の動きを読み取るだろう。こうして王の不信は無限に循環し、シラクスの市民は言葉と表情を失ってゆく。メロスがシラクスを訪れた時に「怪しく」思った「まちの様子」とは、まさにそうした状態を反映していた。

内面の病に苦しみ、そこから逃れる方法を知らない者が救われるためには、

解決の方法を知っている他者が現れ、その者が「腹綿の奥底」など幻想の産物であることを教えなければならない。メロスは、この役目を担った人物として登場している。従って物語は、人間不信に陥ってそこから抜け出るすべを知らない者が、予期しなかった導き手によって人間的回復を果たし、共同体に復帰していくというプロットに沿って展開していくことになる。

4

メロスの「竹馬の友」で「無二の友人」であるセリヌンテイウスは、この物語でどのような役割を担った登場人物なのであろうか。

セリヌンテイウスは、賢明かつ冷静で、人望も厚い。従って、彼はシラクスの良識的な人物である。ということは、セリヌンテイウスは王デイオニスの王政を長きにわたって経験し、その人となりをかなり熟知しているものと思われる。

そのセリヌンテイウスが王城に召された時の態度は次のようなものであった。

竹馬の友、セリヌンテイウスは、深夜、王城に召された。暴君デイオニスの面前で、佳き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情を語つた。セリヌンテイウスは無言で首肯き、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかつた。セリヌンテイウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスに事情を聞いたセリヌンテイウスは「無言で首肯」き、その後メロスを「ひしと抱きしめた」。これはメロスの言うことに同意し、無条件で信任するという明確な意思表示である。この場合、メロスへの信任は王の否定と同義である。従って、セリヌンテイウスの態度がデイオニスの意表を衝いたことは間違いない。王に公然と反旗を翻した者へ同意すれば自らの命が危うくなることはシラクス市民にとって周知のことである。にもかかわらず、セリヌンテイウスはデイオニスに楯突いたのである。

セリヌンテイウスは、我を信じよと言った者を信じることの尊さを身をもって示し、それができないデイオニスの態度を暗に批判している。だから、セリヌンテイウスもまた勇者である。セリヌンテイウスは人質としての苦境を耐え抜き、メロスの帰還をただ信じ続けたから勇者としての資格を得たのではない。もっと能動的に、市民としての立場から、王の態度が間違っていると示し、その姿勢を崩さなかったから、勇者たり得たのである。

セリヌンテイウスは磔にされて王にからかわれても、「メロスは来ます」とだけ答え、我を信じよと言った者を信じ続ける姿勢を貫いた。その結果「信実」の勝利が成立し、王の不信が妄信であったことを決定的にした。セリヌンテイウスは、内面と言表が正確に一致する人間の典型を誠実に履行した共同体の内部の人間であった。

5

妹の結婚式を無事すませたメロスは、花嫁である妹に向かって次のように言っている。

「おめでたう。［…］私がゐなくても、もうおまへには優しい亭主があるのだから、決して寂しい事は無い。おまへの兄の、一ばんきらひなものは、人を疑ふ事と、それから、嘘をつく事だ。おまへも、それは、知つてゐるね。亭主との間に、どんな秘密でも作つてはならぬ。おまへに言ひたいのは、それだけだ。おまへの兄は、たぶん偉い男なのだから、おまへもその誇りを持つてゐろ。」

メロスは「人を疑う事」と「嘘をつく事」が一番嫌いだと述べている。それに加えて、夫婦の間に「どんな秘密でも作つてはならぬ」と申し渡している。これらは明らかにデイオニスを念頭において言っている。メロスがデイオニスに対して我慢ならなかったのは、「民の忠誠」に「私慾」を透かし見、メロスの「死ぬる覚悟」に命乞いのでまかせを読み取るような、ありもしないものを作り出してしまう態度であった。嘘をつくのはむろん罪悪だが、嘘のないところに嘘を作り出して、隠さなければならないような「秘密」の領域を心の中に勝手に作り出すこともメロスには我慢ならないのである。

メロスが妹に申し渡したこと―人を疑わず、正直な物言いをし、すべてを公開せよ―とは、いつでも互いにまるごとの自分を差し出し、それをそのま

ま受け取ることによって信頼関係を築けということである。メロスの「信じること」は、丸ごとの自分を差し出す双方向性と深く関係している。メロスが自分のことを「たぶん、偉い」というのは、自分の信念がおそらく間違っていないという予断であり、メロスはこの後生きた経験の中でその正しさを証明していくことになる。

走り出したメロスは、濁流を越え、山賊の襲来を退け、順調にシラクスへの道を戻っていく。ところが、疲労という内側からの思わぬ敵の襲来によって地に倒れ伏し、約束の履行が困難になる転換点を迎える。

地面の上に横たわったメロスは、走れないことによって結果的に示す不実と、その不実の後に起こりうる出来事について様々に考える。それからメロスは、不実の結果に対して開き直り、神に対して申し開きをする。それは、未だ判らない結果に対する自己肯定的な先取りであると同時に、ありもしないものを作り出す嘘の力でもある。

まどろみから目覚め、湧き水を口にして体力の回復を確認したメロスは、地に倒れ伏していた自分を以下のように振り返っている。

私は信頼されてゐる。私は信頼されてゐる。先刻の、あの悪魔の囁きは、あれは夢だ。悪い夢だ。忘れてしまへ。五臓が疲れてゐるときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロス、おまへの恥ではない。やはり、おまへは真の勇者だ。再び立つて走れるやうになつたではないか。

メロスは、開き直りや言い訳を「悪魔の囁き」や「悪い夢」であったとし、自らに「忘れてしまへ」と言い聞かせている。原因が何であれ、心の内側に過度に重みづけをし、自分に囚われてしまうことの危険を、メロスは知っているのだ。メロスにあっては、危機における敵は自分の裡にあって、味方は外部にいる。危機に瀕した際のメロスの態度は、不信の病に陥っているデイオニスを知る上で示唆的である。デイオニスの言う「腹綿の奥底」とは、メロスにとっての「悪魔の囁き」であり「悪い夢」なのである。この囚われからいかに逃れるのか。メロスの場合、それは「信頼されている」と感じられる他者の存在であった。

走り出したメロスに迷いはない。メロスは名誉を守るために走るのだと言う。メロスにとって殺されても守らなければならない名誉とは何であるか。それは人を疑わず、嘘をつかないという信憑を全人格をかけて証明することである。そのために為すべきことは、ただひたすら走り続けることであった。

6

セリヌンテイウスが磔台から降ろされた後、メロスとセリヌンテイウスが互いに不実を告白し、一発ずつ頬を殴り合う場面がある。

「セリヌンテイウス。」メロスは眼に涙を浮べて言つた。「私を殴れ。ちから一ぱいに頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君が若し私を殴つてくれなかつたら、私は君と抱擁する資格さへ無いのだ。殴れ。」

セリヌンテイウスは、すべてを察した様子で首肯き、刑場いつぱいに鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴つた。殴つてから優しく微笑み、「メロス、私を殴れ。同じくらゐ音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たつた一度だけ、ちらと君を疑つた。生れて、はじめて君を疑つた。君が私を殴つてくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕に唸りをつけてセリヌンテイウスの頬を殴つた。

「ありがたう、友よ。」二人同時に言ひ、ひしと抱き合ひ、それから嬉し泣きにおいおい声を放つて泣いた。

メロスはセリヌンテイウスとの約束を守ったが、途中で「悪い夢を見た」ことを隠さずに告白している。セリヌンテイウスはメロスの言う「悪い夢」が何であるかを問わず、「すべてを察した様子で首肯き」、言われた通りメロスを殴っている。セリヌンテイウスもまた、メロスを疑った不実を告白してメロスに殴打を求め、メロスもそれに応えている。

ここで二人が演じたのは、一方が丸ごとの自分を差し出し、相手がその真偽の如何に拘わらず黙って受け入れることである。これを見ていた群衆の中から「歓歓の声」が洩れるように、メロスとセリヌンテイウスとのやりとりは厳粛なものとされている。二人を「群衆の背後から」「まじまじと見つめてゐた」デイオニスは、メロスとセリヌンテイウスに近づいて次のように申し出る。

「おまへらの望みは叶つたぞ。おまへらは、わしの心に勝つたのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかつた。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほしい。」

王が理解したのはこういうことだ。「信実」は、人が相手にありのままの自分を差し出し、相手がそれを黙って受け取ることを繰り返す途切れのない連鎖の中で経験される。メロスとセリヌンティウスは、困難な状況の渦中にあっても、またそうした状況の後でも、変わることなく愚直にこの連鎖を維持し続けた。

デイオニスが不信の病から回復し、共同体に復帰するためには、デイオニスもまた丸ごとの自分を差し出し、それを相手に受け取ってもらわなければならない。そのためには、相手＝「仲間」が必要だ。「仲間」として受け入れてもらう以上、強権によってはならない。デイオニスはメロスとセリヌンティウスに「どうか、わしの願ひを聞き入れて、おまへらの仲間の一人にしてほしい」と願い出ている。共同体の一員として遇されることを求めたデイオニスを、民衆が「万歳、王様万歳」の「歓声」で迎え入れたことはテクストの通りである。

遠からず、シラクスの市は平和の秩序を回復するものと思われる。王が望んでいたこととは「仲間」を見つけることであり、それは我を信ぜよと愚かな自分をありのままに差し出したメロスの登場によって可能となったのだ。

人の心はあてにならず、「私慾のかたまり」であるという抜きがたい不信に囚われ、その不信の病を癒すすべを知らずに「孤独」であった王デイオニスは、人間への信を基礎とする「平和」を望みながら、人の心などあてにならないと信じ込み、苦悶していた。そこに無名で無欲の男が外部からふらりと現れ、人の「腹綿の奥底」など王の頭が作り出した幻想にすぎないことを示し、その病を癒した。メロスの英雄譚はデイオニスの回復譚と表裏の関係にあり、シラクスの秩序回復に重点を置いたテクストの結末は、後者の比重が決して軽くはないことを示している。

シラクスに平和が回復されたからといって、メロスには何ら得するところがない。彼はシラクス市外の「村の牧人」であり、市の平和は彼に直接は影響しない。「政治がわからぬ」メロスは、「正直者」ゆえに今後のシラクスの市政に関わることもないだろう。物語は、メロスは裸であることを指摘されて「ひどく赤面」する場面で終わっている。それは、メロスの本来の性向―目の前の出来事に単純に反応し、無防備であること―が「勇者」として遇されても不変であることを示している。「人は私慾のかたまり」という抜きがたい猜疑で苦悩する王の共同体への復帰とシラクスの秩序の回復は、外部から来た、無名であり続ける人間の、無償にして無私の行為によって果たされた。その行為が、内面性（意志）に支えられていないところに、このテクストの最大の特徴がある。

※　太宰治の作品本文の引用は、『太宰治全集第三巻』（平成元・10、筑摩書房）に拠った。